

柔道に見る日本

● 放眼日中 ●



たまたまテレビをつけると、アジア大会の柔道競技を中継していた。

男女軽量級4階級の決勝が行われていたが、その内三つの階級で日本選手は韓国、ウズベキスタンの選手に敗れてしまった。アジア大会の日本代表は、必ずしも日本のトップではないようだが、日本発祥の柔道の変貌を感じざるを得ない。

柔道着がカラフルになった頃、「柔道はJudoになった」といわれた。細かいルール改正により、日本が目指す「美しい柔道」「一本を目指す柔道」が通用しなくなり、五輪や世界選手権で優勝はおろか、早々に敗退するケースも目立っている。最近では「技あり」と「一本」に統一され、勝敗も少しははつきりしてきたかもしれないが、だからといって日本選手が完全に勝っている、と言える状況ではない。

技量が拮抗している優秀な選手が世界中にたくさん出てくることは、柔道にとつて決して悪いことではない、五輪種目として定着するなど、むしろ喜ぶべきだ。ただ、テレビのアナウンサーが連呼する「日本のお家芸」という言葉は、選手に無用なプレッシャーを与えているように、何とも残念だ。

何より、解説者が何度も話している「きちんと組み合ってから技を繰り出すのが日本柔道」という言葉が、妙に引っかかってくる。相手選手は組み手が不十分でも強引に技をかけてくるが、その不十分な組み手から繰り出される技に投げられ、抑え込まれて敗北を喫しているのも現実である。

この現状は、世界で置かれている日本の状況と重なって見えてならない。「日本の技術は一流」とか「日本は素晴らしい国」という話を国内ではよく耳にするが、アジアでは「技術は一流でも、サービスは三流」とか、「不必要な技術を加えて価格が高過ぎる」などといわれて久しく、一時日本のお家芸であった家電などの凋落は甚だしい。

どうして日本選手は不十分な組み手でも強引に投げを打ち、相手より先に攻め込もうとしないのだろうか。栄光の時代に選手だった人々が監督やコーチになり、世界の柔道が激しく変化していることが頭では分かっているけど、対応できていないのではないかと疑ってしまう。「美しい柔道は必要かもしれないが、相手より先に動くことがルールで求められている中、世界の変化に対応しなければ勝利は得られない」ということではないか。

いや、選手の側にも小さい頃に見



コラムニスト・アジアソウオッチャー 須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

た、見事な投げで金メダルを取った偉大な先輩の残像があり、また身近に奇麗な柔道をするコーチがいれば、それに憧れてしまうのも無理はない。もし、日本柔道の復活を真に願うのであれば、残念ではあるが、家電メーカーの一部に見られるように、外国人の手を借りるしか方法はないのでは、と全くの素人は思ってしまうわけである。

東京五輪の前に、各競技団体で不祥事が多発しているのも、個々の事情は別に、これまでの体制が既に維持できなくなってきたこと、の表れであろう。スポーツも企業も適切に、そして柔軟に変化して、発展していくことを切に願っている。「伝統的な日本柔道の復活」ではなく、「世界に対応した新しい日本柔道の創生」で頑張ってもらいたい、と勝手に思っている。